ワーケーション導入によるキャンプ場活性化について

Revitalization of campsites by introducing workation

國定 康子 Yasuko KUNISADA

株式会社スペースキー アウトドアプロモーション本部

神田 隆介 Ryusuke KANDA

一般財団法人休暇村協会 営業本部

1. ワーケーション事業について

(1) 事業目的

昨年令和2年度、環境省において国立・国定公園及び国民保養温泉地における誘客やワーケーションの推進の支援を通じて、新型コロナウイルスの流行の収束までの間の地域の雇用の維持・確保等に資することで、新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受けている地域経済の再活性化を目的に「令和2年度（補正予算）国立・国定公園への誘客の推進事業費及び国立・国定公園、温泉地でのワーケーションの推進事業費の間接補助事業」が実施された。

キャンプ場を運営する一般財団法人休暇村協会とキャンプ場支援業務を行う株式会社スペースキーは協業し、with コロナの状況下、また、after コロナを見越し、1. 新たな集客 2. 長期滞在 3. 平日利用促進を見込める事業としてワーケーションプランを開発した。

(2) 事業内容

(i) ワーケーションに必要なハードの整備

電源付きサイト、場内 Wi-Fi が無いキャンプ場を仕事場として提供するにあたり、ポータブル電源、ポケット Wi-Fi の手配の他、キャンプ道具を持ち合わせていない人でも利用できるように、パソコン操作に最適な高さを要したキャンプテーブル、チェア、屋外空間だからこそ日差しによりモニターの見づらさを軽減するためのタープテントなど機材を手配した。また雨天などを考慮し、管理棟内でも仕事できるようにスペースの確保を行った（写真-1）。

写真-1 ワーケーションの様子

(ii) ワーケーションに必要なソフトの整備

キャンプ場だからこそ家族連れでの参加が見込めること、長期滞在しても飽きがこないプラン内容にするために、キャンプ場外の地域事業者4社と連携しアクティビティ開発を行った。アクティビティは①保護者が働いている間に子どもも国立公園内を楽しみながら自然を学べるアクティビティ（クラフト作り、カヌー）②仕事の前後にリラックス出来る大人用アクティビティ（アウトドアサウナ、カヌー）③週末親子で楽しめるアクティビティ（サップ、ボート）計6種類を用意した。ワーケーションに取り組む地域が多い中で、その地域が選ばれるためにも、地域特性を活かしたこのアクティビティの開発と提供は重要だと感じた。

(iii) モニターツアーの実施

モニターツアーで得られた感想・評価・課題は後述するが概要は下記の通りである。

開催場所：休暇村裏磐梯オートキャンプ場

実施日：2020年10月1日（木）～4日（日）3泊4日

告知方法：キャンプ場検索・予約サイト「なっぷ」メールマガジン

参加者：東京、神奈川、福島から大人のみ3組、親子3組、計6組15人（うち子供4人）※満員御礼、また6組中4組がIT企業社員という特徴あり。

参加費：交通費のみ参加者負担

検証内容：①事業者同士の連携が図れるか？

②需要があるか？

③期間、曜日は適当か？

④課題と対策の洗い出し

(iv) 販売

モニター参加者の協力を得て、モニター時の写真をもとに、裏磐梯観光協会での広報の他、休暇村、アクティビティを提供した各地域事業者のホームページで販売しているが、キャンプ場でのワーケーションプランとしては現在31組90名に利用を頂き、コロナ禍において好評を得ている。

(2) キャンプ場でワーケーションを導入する背景

ここでは、何故この事業に取り組んだのかを簡単に触れておく。コロナ禍において休業要請があり昨年度は年間稼

働率が例年より下回ったが、「オートキャンプ白書 2020」によると、コロナ前の 2019 年の稼働率は 5 年連続過去最高の 17.5%とされている。観光庁の宿泊旅行統計調査で、2019 年の宿泊施設の客室稼働率が 62.1%と比べると、レジャー目的で利用されているキャンプは主に週末、学校の長期休み時に利用が制限されることに加え、台風など天候に左右される宿泊形態のため低い状況だ。また「なっぷ」調べによるとキャンプ 1 回あたりの平均宿泊数が 1.15 泊に留まっている。そこで平日を絡めた連泊、レジャー目的、家族利用以外の需要喚起が求められている。

2. モニターツアーから得られたこと（検証内容）

（1）事業者同士の連携が図れるか？

結果、連携は図れたが、仕事の前後にアクティビティを提供することは、提供側には早朝の暗い中での準備、暗くなってからの撤収などアウトドアアクティビティならではの苦労があった。また大人が仕事をしている間に子供が参加出来るアクティビティ開発においては、小学生以上は学校を休ませることへの参加者のハードルがあり、未就学児というターゲットを考慮すると保護者同伴の提供で折り合いをつけざるを得なかった。モニターツアー前はそこまでしてワーケーションに取り組む必要があるかの疑問の声もあったが、参加者から「キャンプ場にただけでは、この土地の魅力を十分に体感できなかったのでアクティビティを体験出来て良かった」「アクティビティを一緒にやったからこそ他の参加者と話をするきっかけになり、異業種交流会並みに仕事の話も出来て良かった」と好反応があり、キャンプ場もアクティビティ事業者もワーケーションと一緒に取り込むことで新規顧客開拓につながる感触を得ていた（写真-2）。

写真-2 アクティビティの様子（メガ SUP）

（2）需要があるか？

前述の通り満員御礼の開催となり、申込動機は、「キャンプに興味があったから」「ワーケーションに興味があったから」が大半を占め、キャンプ場でのワーケーション需要が伺えた。※参加者のうちワーケーション経験は 6 組中全員初めてと回答。参加してからのインタビューでは、「ネット

環境と天候が良ければ自宅よりも良い」「仕事をしながらも子供たちがパパを近くに感じられて良いと思う」「キャンプ中ということがクライアントとのアイスブレイクにつながり、楽しめた」という評価がある一方「仕事をするためにキャンプに行くのではなく、休みの中でも仕事出来る環境が用意されていると思った方が今後もキャンプ場で仕事をすると思う」という意見に賛同者が多く、キャンプ中でも働ける環境があることを訴求する方が効果的なようだ。

（3）期間・曜日は適当か？

実施日が木曜日金曜日と平日 2 日間の勤務日となっており、参加者の大人 11 人中（うち 3 人は専業主婦）4 人は有休を取得して参加していた。その理由は、「移動時間は仕事が出来ないため」「ネット環境次第では仕事にならないため」であった。期間に関しては「仕事だけでなく、3 日目の週末にしっかり観光やアクティビティの時間があつたので、3 泊がちょうど良いと思った。」「初日は移動、準備等で時間が取られるので仕事期間が 2、3 日あつた方が良い」「1 週間、2 週間でもいいと思う」という意見がある一方、「個人で仕事をしている人にはちょうど良いがチーム仕事、客向き合いの仕事をしている人は、これ以上の期間は落ち着かないと思う」という意見もあり、有給取得者を考慮すると 3 泊のプランが適正だと思われる。

（4）課題と対策の洗い出し

ネット環境が不安定であること、携帯電話が圏外であることが一番の課題だった。ここは、キャンプ場においてネット環境を予約・販売ページで「管理棟ならテレビ会議ができる」「A サイトは〇〇の携帯電波が入る」等詳細な情報発信が求められる。

3. 今後ワーケーションに期待すること

キャンプ場で仕事することに評価は得たものの、家族連れからは「親の都合で子供の学校を休ませられない」という理由から未就学児の子供連れの参加に偏ってしまった。保護者が共働きを考慮すると託児所との連携が求められる。

ある学校では、平日家族でキャンプ等に行く場合、自然体験学習として出席扱いになるという。また在宅勤務は認められていてもリモート勤務は不可能な企業がある一方、ワーケーション費が支給されている企業もある。ワーケーション推進のためには、企業・学校の理解と協力を得たい。

補注及び引用文献

- 1) オートキャンプ白書 2020 (2020) : 日本オートキャンプ協会, p.61
- 2) 2021 年 7 月よりキャンプ場検索・予約サイト「なっぷ」及びキャンプ場支援業務は株式会社スペーススキーから株式会社 R.project に事業承継されている。